

備した。アライグマからの食害を防止するとともに、自然環境下の閉鎖的な空間で過ごすことにより順化を促すことが目的である。試験的に同年9月に5個体（いずれも野生の成体）を導入し、経過を観察している（2024年3月現在）。

### 今後

引き続き各関係機関と連携し、公園内における

イシガメ保全手法について検討していく。

### 謝辞

本調査を実施するにあたり、国営明石海峡公園神戸地区あいな里山公園の皆様にご協力いただきました。また、本調査は、神戸市環境局自然環境課からの業務委託により行いました。この場を借りて御礼申し上げます。

## 続・江戸の町のどこにイシガメがいたのか －六義園で暮らした大名の日記から－

後藤康人<sup>1</sup>・辻井聖武<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 100-1498 東京都八丈島八丈町大賀郷 2551-2 八丈島を盛りあげ隊 歴史民俗資料館担当

<sup>2</sup> 190-0022 東京都立川市錦町 2-1-22 株式会社自然教育研究センター

Where Were *Mauremys japonica* in Edo? Part II – Insights from a Daimyo's Diary at Rikugien Garden.

By Yasuhito GOTO<sup>1</sup> and Masamu TSUJI<sup>2</sup>

<sup>1</sup> *Hachimoritai staff in charge of history and folklore museum, 2551-2, Okago, Hachijo-machi, Hachijojima, Tokyo, 100-1498, Japan*

<sup>2</sup> *Center for Environmental Studies, 2-1-22, Nishiki-cho, Tachikawa, Tokyo 190-0022, Japan*

### はじめに：江戸の町に生息していたイシガメ

前回、第10回淡水ガメ情報交換会で、筆者らは江戸時代（1603–1868年）の江戸（東京都西部中央部）を対象に、歴史資料（遺跡・風俗画・文献等）からニホンイシガメ *Mauremys japonica*（以下イシガメ）が生息していたと推定される場所10箇所を報告した（後藤・辻井, 2023）。その後も引き続き調査を重ねたところ、注目すべき資料を見出したため、該当地の実地踏査と内容の検討を行った。

### 「不忍池蓮見」に描かれたカメ：

### 谷田川から不忍池への流路を踏査

江戸時代後期に刊行された『江戸名所図会』（斎

藤他（著）・長谷川（画）、1834-36）の「不忍池蓮見」には、水面に多数のイシガメやニホンスッポン *Pelodiscus japonicus* と思われるカメが描かれている（図1）。同時代の自然誌として知られる『武

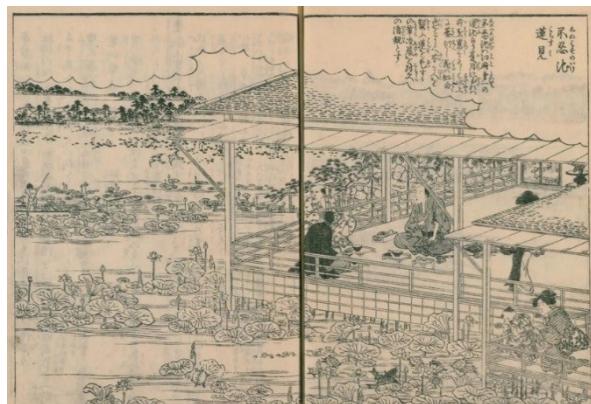


図1.『江戸名所図会』不忍池蓮見（国立国会図書館デジタルコレクションより）

江産物志』(岩崎, 1824) にもカメの名所として不忍池があげられているが, 果たしてそれらのカメはすべて放し亀・放生に因るものなのだろうか。現在の不忍池(東京都台東区上野公園)には流入入河川はないが,かつては石神井川から分岐して不忍池に流れ込む谷田川が存在していた(角田, 2015)。暗渠化された現在の谷田川通りを踏査すると, イシガメ遺存体が出土した動坂遺跡(動坂貝塚調査会, 1978) や, 同じ『江戸名所図会』でカメを連れ歩く子どもの姿が描かれている「白髭明神社」が近いことを確認した。動坂遺跡は文京区本駒込に, 白髭明神社(現・上田端八幡神社)は北区田端に所在する。

#### 柳沢信鴻『松鶴日記』の検討:

##### 六義園のカメはどこから連れてきたものか

谷田川は現・王子駅(北区王子)付近で石神井川から分かれ, 南流して不忍池に向かっていた。この王子～不忍池間に国の特別名勝に指定されている六義園(文京区本駒込)が所在する(図2)。5代将軍徳川綱吉の側用人だった柳沢吉保が造成した回遊式築山泉水庭園である。吉保の孫にあたる柳沢信鴻(1724–1792)は隠居後に六義園に居住し, その生活ぶりを詳細に書き残した(小野,



図2. 現在の六義園 (2023年10月4日撮影)

2017).『松鶴日記』(柳沢, 1982; 北区史編纂調査会, 1992)は信鴻による天明6(1786)年1月から寛政3(1791)年8月までの日記で, 今回の調査の結果, 野外で入手したイシガメと推定されるカメを園地の池に放した記述を3箇所確認した(図3)。年月日, 入手場所, 状況と頭数は以下である。

天明9年3月18日(1789年4月13日): 西ヶ原一里塚。家臣が拾った1頭。

寛政2年3月14日(1790年4月27日): 飛鳥山麓。「放亀」9頭。

寛政3年4月14日(1791年5月16日): 飛鳥山麓。「村童放亀たる」17頭。

原文にある「放亀」という表現が放し亀向けの捕獲個体を意味するのか, あるいは川漁や川遊びで捕獲された個体の再放流だったのか, 詳細は不明だが, いずれにせよ飛鳥山(現・北区王子の飛鳥山公園)付近を流れる石神井川もしくは谷田川に生息していた野生個体である可能性が高いと

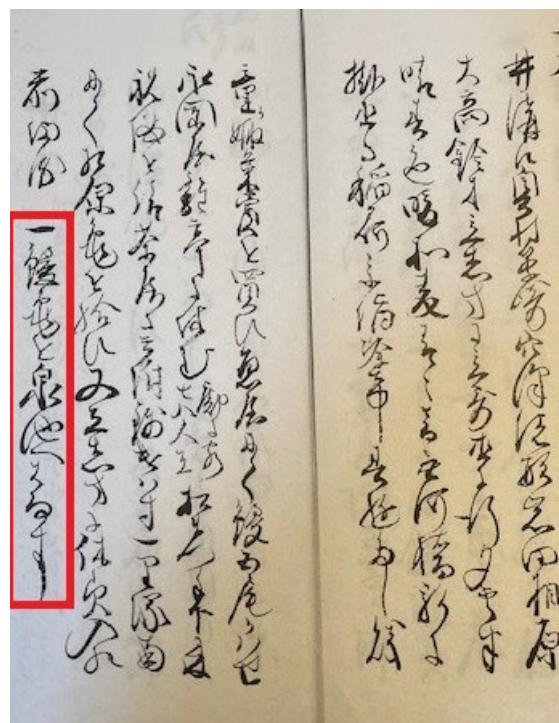


図3. 松鶴日記 寛政2年3月14日(囲み部分「鰐亀を泉池に放す」とある)

考えられる。

**おわりに：**

**江戸の町のイシガメ生息地を河川から注目する**

今回の調査で石神井川～谷田川～不忍池にかけてイシガメが生息分布していた蓋然性が高いことがわかった。江戸の町のイシガメについては歌川広重の錦絵「深川万年橋」の放し亀のイメージが強く、巷説では他所から持ち込まれたカメではないかと語られることが多かった。しかし、石神井川は隅田川（旧・荒川）に合流し、その下流に（小名木川が隅田川へと注ぐ川口に架かる）万年橋が所在する。先述の『武江産物志』ではカメが多く見られる場所として隅田川に近い千住天王前池（現在の素盞雄神社、荒川区南千住）もあげられている。また、近年では足立区内の水辺環境でイシガメが繁殖個体含め複数個体確認されたことから（辻井、2023）、江戸時代の荒川（旧利根川）水系を含めた東部低地帯に着目して調査を進めるとともに、さらには江戸の町を流れている他の水系にも注目してゆく。

**引用文献**

- 動坂貝塚調査会. 1978. 動坂遺跡. 動坂貝塚調査会, 東京. 241p.
- 後藤康人・辻井聖武. 2023. 江戸の町のどこにイシガメがいたのか. p.60-61. 第10回淡水ガメ情報交換会講演要旨集, 東京.
- 岩崎常正. 1824 (2025年4月20日確認). 武江産物志. 国立国会図書館デジタルコレクション. 入手先<<https://dl.ndl.go.jp/pid/2557805/1/18>>
- 北区史編纂調査会. 1992. 北区史 資料編 近世 I. 東京都北区, 東京. 623p.
- 小野佐和子. 2017. 六義園の庭暮らし 柳沢信鴻『宴遊日記』の世界. 平凡社, 東京. 252p.
- 斎藤幸雄・幸孝・幸成(著)・長谷川雪旦(画). 1834-1836 (2025年4月20日確認). 不忍池蓮見. 江戸名所図会. 国立国会図書館デジタルコレクション. 入手先<<https://dl.ndl.go.jp/pid/2563393/1/25>>
- 角田清美. 2015. 武蔵野台地の河川と水環境. 駒澤地理 (51) : 35-58.
- 辻井聖武. 2023. 足立区におけるニホンイシガメの記録. 御亀楽 (1) : 10-11.
- 柳沢信鴻. 1982. 松鶴日記(第4巻・第5巻・第6巻). 国文学研究資料文庫. ゆまに書房, 東京.